

学校の畑を通して「繋がる」活動

1 目的

解決を目指す課題

17 パートナースhipで
目標を達成しよう



地域との繋がりを広げる

志を同じくする地域の方や国内外の同世代の
仲間と協力をする
→SDGs 17-7: 効果的な市民社会のパー
トナースhip

食品ロスの削減

・学校の食堂から出る野菜くずを堆肥化し、
有効活用し食品ゴミを減らす
・食品ゴミを減らす重要性を理解する
→SDGs 12-3: 食品ロスの削減

12 つくる責任
つかう責任



活動の目的

私たちの持つ力（知識、体力、経験）を社会で活用する
畑を通じて志を同じくする方々と繋がる

活動の目標

科学的な視点を持ち、活動を持続可能にしていく
人との繋がりを大切にし、活動の輪を広げていく

解決を目指すに至った背景

2021年10月に技術・家庭の授業の一環で育て、余ってしまったさ
つまいもを地域の子ども食堂に寄付した。この活動で得た「人と繋がる
ことの楽しさ」や「地域に貢献できる達成感」が後の畑づくりのモチ
ベーションとなった。その後、授業で使われなくなり放置された畑を持
続させる活動として、学校の畑づくりを生徒主体の有志で始めた。

食品ロスに対する問題意識を持っており、日々学校の食堂から大
量に廃棄される野菜くずの処理方法を模索し、コンポストプロジェク
トを始めた。活動資金がないJRC同好会が、肥料を継続的に調達
することもできる。堆肥は学校の畑で活用している。



2 手段

取組内容

①方法

1. 学校の食堂から出る野菜くずの堆肥化：つくば市環境衛生課に情報提供や資材提供をしていただき始めた。試行錯誤しながら生物班からミズを提供してもらったり、校内で廃材となっていた土管を活用して、学校の食堂から出た野菜くずを堆肥化している。できた堆肥を学校の畑で活用する。

2. 学校の畑での農作物の栽培と利用：生徒の家族が営む農園から肥料となる馬糞をいただいたり、地域住民や卒業生から種や苗を提供していただいたり、有機農業を営んでいる「やさと農場」から助言をいただきながら、畑ではじゃがいも、ニンジン、枝豆、ナス、ピーマン、きゅうりを栽培している。7月には収穫したウクライナからの避難民の方々にニンジンとじゃがいも、玉ねぎを寄付した。じゃがいもを地域の子ども食堂「竹園土曜広場」に寄付することもできた。

3. 畑での活動を持続させるための研究活動：大会や発表の機会に参加したり、SNSを活用し発信をし活動の輪を広げている。

②主体：JRC同好会の会員を中心に活動に興味を持った生徒

③対象者：学校にいる生徒や先生

④時期・期間：

2021年10月に始め週2回放課後約1時間集まり活動している。

⑤場所：茗溪学園



2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

同好会としての活動資金はゼロで、協力をしてくれる様々な人の支援で活動を行うことができている。
例えば、地域の方に種や肥料の馬糞を提供してもらったり、やさと農場の社長から小麦を提供していただき育てる過程をサポートしてもらったり、つくば市環境衛生課の方にコンポストの資材や情報提供をいただき活動している。
学校で使われなくなった土管をコンポストとして再利用したり、カマや鍬を譲ってもらったりして、廃材の活用もしている。

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

活動を持続的なものにできるように、様々な市民団体や組織、研究者、農家に助言や資材や情報を提供してもらう。
これまでに活動で繋がった方々や団体：つくば市環境衛生課・やさと農場の社長・子ども食堂「竹園土曜広場」・土浦ユネスコ協会・NPO法人シャローム・Koinonia Education Center（ケニア）・Raffels Christian school（インドネシア）・Thai Science project Exchange（タイ）

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

農作物を育てる：ミニトマトや枝豆などはスペースが限られていても家庭で育てられる。どうしても余ってしまうような農作物は身近にいる人に提供することもできる。
食品ロスの有効活用：食品ロスはいらぬものを買わない、冷蔵庫を整理することや食品ロス問題に関心を持ち情報を集めるだけでも課題解決に貢献することができる。ダンボールコンポストや様々な資材をを無料で提供してくれる団体も多くコストがかからない。
繋がりを広げる：SNS等を利用したり、発表会などに参加すると同じ志を持つ多くの人にであうことができる。

その他

私たちは畑での活動の輪を広げ、繋がることを大切にしている。
SNSなど様々な方法で繋がった方々との交流を通して新たな考えや方法を模索している。

茗溪学園JRC同好会
Instagram



3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

- ・活動を通して得たこと
 - 安全な食をつくる学び
 - 地域社会との繋がり
 - 国際交流、研究者との学問的交流の機会
 - 活動を持続させ、広げていくための創造性と好奇心や論理的な思考力
 - 地域における社会貢献のあり方の学び
 - 社会問題への関心
- ・活動内で得た成果
学校の食堂から出た食品ロスは7ヶ月で約300kg堆肥化することができた。活動を通して食品ロスへの関心が高まり、廃棄予定の食材を有効活用するだけでなく、量を削減できるように心がけるようになっていと感じる。また、学校の畑で育てたニンジン、じゃがいも、玉ねぎなどは地域の子も食堂やウクライナからの避難民の方々に寄付することができ地域で繋がりを広げることができた。同じ志を持つ同世代の仲間とアイデアを共有することもできた。タイ、インドネシア、ケニア、ベトナムの学校とも繋がり、様々なインスピレーションを受けた。
- ・関係者や地域への影響
活動を通して繋がった仲間にインスピレーションを与えることができた。自分たちが学校の畑で育てた小麦の芯を使ってストローを作るアイデアをサポートしている。

今後の展望

- ・畑を整備し持続可能な環境をつくる
- ・畑での活動を継続させるためにスムーズな循環を促す習慣としてのシステムを組み立てる
- ・多様な種類の農作物を育てていき、必要としている人とネットワークを築いていく
- ・校内の人に情報共有をし、校内で活動の輪を広げていく
- ・志を同じくする地域や世界の仲間と情報交換をし、校外で活動の輪を広げていく



多様なパートナーシップとマイボトルへの給水で使い捨てプラ削減を推進する「ボトルフリープロジェクト」

1 目的

解決を目指す課題

弊社は水道直結ウォーターサーバー「ウォータースタンド」のレンタル事業を行っています。



誰もがアクセスできる水道水を活用した「ウォータースタンド」からマイボトルに給水することで、使い捨てプラスチックボトルを削減する活動「ボトルフリープロジェクト」を2018年から開始しました。



当プロジェクトでは、30億本の使い捨てプラスチックボトルを2030年までに削減することを目標に、地方公共団体や企業、大学をはじめとする多様なステークホルダーと連携を図っています。



2022年8月末までに49の自治体・教育委員会と協定を締結し、地域の公共施設等に誰もが無料でマイボトルに給水できる「ウォータースタンド」を設置しています。このことにより、事業を通じて使い捨てプラスチックボトルの削減本数とCO2排出抑制量を推計し、持続可能な社会の実現に貢献することを目指しています。

解決を目指すに至った背景

弊社の「ボトルフリープロジェクト」の活動は、気候変動の対策の両輪である緩和策としてのCO2排出量の削減・使い捨てプラスチックの削減と、適応策としての水分補給のニーズを両立することを目的としています。誰もがアクセスできる水道水を活用しマイボトルへの給水と呼び掛けることがSDGs達成に向けた「初めの一歩」となるよう、

2022年8月現在、49の地方自治体とともに地域・企業・個人・教育機関一体でパートナーシップの下で取り組みを行っています。

プラスチック資源の循環や使い捨てプラスチック削減は喫緊の課題となっております。弊社はレジ袋やプラスチック製ストローを削減することはできませんが、飲み終わったら捨てられるペットボトル削減に事業を通じて貢献することができると考えました。

SDGsのゴールにおいても環境負荷軽減は重要な要素です。一方で、国内における安全安心でおいしいお水のニーズは拡大しています。水道直結ウォーターサーバー「ウォータースタンド」は地下水の採掘やボトルの運搬などで生じる環境負荷を生じないため、今後も事業を通じてSDGs達成に貢献して参ります。

2 手段

取組内容



【活動の方法】

水道直結ウォーターサーバー「ウォータースタンド」は、ボトル入り飲料水と同様においしいお水を抽出し、この「機能」をレンタル定額制でご利用頂く**サーキュラーエコノミー**型の商品です。

私たちが目指すのは、「ごみを減らす」といったボトル入り飲料水を消費するプロセスの一部を改善することではなく、プラスチックボトルを生産、運搬、消費、回収、リサイクルするというボトル入り飲料水の**消費プロセス全体**を見直し、日々の「**使い捨て**」に目を向けて頂くことです。

● **対象者**：2022年8月現在、全国の地方公共団体・教育委員会と使い捨てプラスチックボトル削減に向けた49の協定を締結し、公共施設に無料給水スポットを設置。この取り組みを2019年6月から3年間継続。



京都市



鎌倉市



志摩市



さいたま市教育委員会

● **場所**：公共施設や学校、企業に無料給水スポットを設置するほか、より多くの人に活動を知って頂くため**WEBサイト**（オウンドメディア）「**ボトルフリープロジェクト**」で活動公表

<https://waterstand.co.jp/bottlefreeproject/>



2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

マイボトルを持っていれば誰もが無料で給水できるスポットを設置することで、参加する際のコストをゼロとしました。
また、給水スポットを設置頂く施設では水道水を使用することで非常に安いコストから取り組みをスタートできるようになっています。

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

弊社は、事業を通じて多様なステークホルダーにパートナーシップを呼びかけ、マイボトルへ給水する活動を拡大しています。ステークホルダーには、地方公共団体や学校、企業が含まれ、それぞれの団体のなかの人から、身の回りのワンウェイ（使い捨て）プラスチックを見直し、水資源をはじめとする自然資源の維持・改善につなげていこうとする動きが出ています。特に、大学生や高校生は他の学校での弊社との取り組みを知って「自分の学校でもやりたい」といったお問い合わせを頂くことが多くあります。

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

誰もが無料で給水できる場所を街の中（公共施設など）に設けることで、マイボトルを携帯するだけで誰もが今日から参加できる取り組みです。

その他

■ 全国の学校での出前授業の実施や探究学習のサポート、当社の取り組みに関するインタビューの受け入れ、産学連携による「給水スタンド」を活用した実証実験のサポートを行っています。

■ 弊社では、コア事業を「ウォータースタンド」事業に転換したことで、軽作業の割合が増え、自転車を活用できるシーンが増加しました。このため、自転車の活用を推進し業務上排出するCO2排出削減を目指す「エコサイクル制度」を導入しています。山奥の工場でもボトルウォーターを生産し、運搬、空ボトルを回収、リサイクル地まで運搬することによって発生するCO2排出量がなくなるという点でカーボンフットプリントにおいては劇的な改善を果たしました。

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

弊社は、どなたでも給水できる「ウォータースタンド」を「給水スタンド」と呼称し、マイボトルに給水頂くことで使い捨てプラスチックボトル削減と熱中症などを回避するための水分補給に役立てています。

マイボトルに給水することは、誰もが今日から取り組み、SDGs達成への貢献を自分事とすることのできる行動です。弊社では、環境問題に対する意識を喚起するため「ウォータースタンド」を什器「ウォータースタンドボックス」に組み込み、誰もが無料で給水できることを分かりやすく示しています。地方公共団体との協定締結の下で設置した「給水スタンド」は2022年6月末で累計1669台となりました。

全国の学校での出前授業の実施や探究学習のサポート、当社の取り組みに関するインタビューの受け入れ、産学連携による「給水スタンド」を活用した実証実験のサポートを行っています。実証実験では「マイボトルに給水できる場所があれば水筒を持ち歩く」と考える人が多いという結果が得られました。



今後の展望

■ 気候変動への緩和策としての側面

「ウォータースタンド」は従来のボトル式ウォーターサーバーと異なり、プラスチックボトルを運搬、回収する必要性がなく、車両の使用を抑制でき、業務において自転車を活用することでCO2削減を実現することができます。これらの特徴はSDGs「13.気候変動に具体的な対策を」の達成に貢献するほか、使い捨てプラスチックの削減を呼びかけることは「12.つくる責任 つかう責任」、「14海の豊かさを守ろう」などにも関連します。

■ 気候変動への適応策としての側面

水は生活にとって欠かせないものであり、水分補給による熱中症の回避は気候変動への適応策として有効です。当社の活動は国立環境研究所気候変動適応センターの「気候変動適応情報プラットフォーム（A-PLAT）」に掲載されております。気候変動に伴う熱中症などの健康被害を回避することは、SDGs「3.すべての人に健康と福祉を」に関連します。

■ 環境学習への貢献

SDGs「4.質の高い教育をみんなに」への貢献を希求し、公立小・中学校に設置する「ウォータースタンド」に環境問題を取り上げたポスターを掲示しているほか、教育機関への出前授業・ワークショップなどを積極的に実施しています。

当社はお水の品質を保つため、半年に1回「ウォータースタンド」のメンテナンスに伺います。この際にフィルタ交換だけでなく新しい情報に更新します。環境問題を自分ごととして捉え、マイボトルへ給水する意義や目的を感じながら環境にやさしい行動全般を対話頂くきっかけとして頂けるよう様々な情報をご提供しています。なお、協定締結の下、埼玉県さいたま市、京都府亀岡市、茨城県館林市、神奈川県葉山町の公立学校で「ウォータースタンド」を設置し、水分補給と環境学習に役立てて頂いています。

リサイクルを推進する会

つくばリサイクルマーケット

1 目的

解決を目指す課題

つくば市はごみの最終処分場として他の市や県外で処理をしている現状がある。こうした課題を「ゴミになるものを減らす」ことで解決に近づける。こどもから大人まで、だれでも楽しく参加できる方法で解決に貢献する。

【11.住み続けられるまちづくりを】
地域に根ざした社会貢献活動
環境に優しい魅力的なつくば
地域の人とひとのつながりを活発化



【12.つくる責任・つかう責任】
使えるもののリサイクル推進
ごみ処理に伴う環境負荷を減らす
使い捨て消費行動の見直し啓蒙



解決を目指すに至った背景

【背景と歴史】

つくばリサイクルマーケットは現在のリサイクルを推進する会の代表・高野正子がクリーンセンターを見学に行った際、使えるものがたくさん捨てられていることに大きな衝撃を受けたことから発案された。1994年初開催され、28年継続している。慈善団体や筑波学院大学との連携など、単なるマーケットに留まらない教育・啓蒙・社会貢献活動として発展・進化し続けている。

【リサイクルマーケットの理念】

ごみにされてしまうモノを生かせるようにしたい、使ってくれる人に出会う機会を作りたいという思いから、「リサイクル品のみを出品できるマーケット」という理念に基づき運営している。この点が“フリー”マーケットとは異なる特徴である。

2 手段

取組内容

リサイクルマーケットを1994年からスタート。

「つくばのごみを宝の山に！」が合言葉。

使用可能なものを捨てずにリサイクルすることを目的とする。

毎回キャンセル待ちが出るほど出店希望が多い。

地域に根ざした活動を積み重ねて来ている。

①方法：一般住民からの出店による
リサイクルマーケットを主催

②主体：リサイクルを推進する会
(代表：高野正子)

③対象者：
つくば市内及び近隣市町村の市民

④時期・期間：現在は年4回
(原則3月,5月,9月,11月の第4日曜)

⑤場所：つくば市中央公園 水のひろば



2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

活動資金：出店料一区画につき500円

資金使途：出店料の1割を被災地や日本赤十字などへ寄付

必要なコスト：

- 公園使用料（3490円の半額/回）
- 社協のボランティア保険 300円/人/年
- 会場設営用品、新型コロナ対応衛生用品
- ポスター、チラシや入場証印刷（紙、インク）
- 通信費（切手）、ウェブサイト維持費
- 当日のスタッフへ弁当代 約500円/人

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

多様な関係者との連携を行なっている。

関係者：地域住民の出店者と来場者
学生を含むボランティアスタッフ

関係組織：

- つくば市役所（後援）
- NPO法人クリエイティブ・リサイクル
- 筑波学院大学（OCP：オフキャンパスプログラムとして30時間の参加機会提供）
- 東南アジアへ衣類を送る 富山県砺波市宮木建設
- 世界の子どもへワクチンを・日本委員会（テレカ回収）

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

ホームページを作成し、出店募集や常時ボランティアスタッフ募集を行っています。

<http://t-recyclemarket.main.jp/recycle.htm>



- 開催方法のマニュアル化
- 会場マップの作成
- ルールを明文化
- LINE・Zoomでうちあわせ効率化
- 出店者連絡はメールと手紙併用
- SNS活用による情報提供

その他

この取り組みはSDGsが提唱される前から行なっているが、今回の応募を契機としてこれまでの活動の見直しや今後の展開について議論するきっかけとなった。

新型コロナにより開催中断したが2021年再開後は出店数を減らすなど密にならないよう慎重に開催してきた。今後の発展のためにスタッフの確保および出店可能数を増やす方策を検討しており、広報活動にも力を入れて行きたい。

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

【課題の解決・成果】

28年間で通算計100回開催、延べ出店数6182、来場者数総計5万人(概算)の参加があった。これにより多くのモノがリサイクル（リユース）され、使えるものがつぎに引き継がれた。結果的にゴミとして排出された場合の環境負荷を減らすことに繋がった。

【関係者・地域への波及効果】

出店料の1割を被災地などへ寄付することをルール化している（累計82400円）。

会場でTシャツやジーンズ、文房具やテレホンカードを集め、他の慈善団体や発展途上国等に寄贈。感謝のメッセージが返って来ている。

OCPプログラムでボランティアスタッフとして参加している学生は、リーダーがどのようにしてチームをまとめているのか、また議論しながら方法を改善していくやり方を学び、組織運営にかかわる経験ができる。

出店者としての経験は年少者や学生にとっては親・教師以外の人と協働するよい機会となり、未来のつくば・社会を担う人材になると期待される。

今後の展望

1. 親子や初心者のための「はじめてのリサイクルマーケット出店講習会」の開催
2. より参加しやすいマーケットへ（例：広い会場への変更や雨天開催可能な場所の確保）
3. つくば市との連携による協力関係の構築（例：駐車場料金の減免）
4. リサイクルセンター見学会の主催



病気と闘う子供たちに安らぎを提供：キッズハウスプロジェクト

1 目的

解決を目指す課題



SDGs目標3

「すべての人に健康と福祉を」の課題に取り組んでいます。

筑波大学付属病院で陽子線治療を行う小児がん患者とその家族に対し、通院期間中の滞在施設を提供し、誰もが平等に医療を受けられる社会、子供達が安心して暮らせる社会を目指し、誰一人取り残さない世界の一助となるような活動をしています。

解決を目指すに至った背景

小児がんの陽子線治療を行える病院は、全国でわずか19ヶ所。その一つである筑波大学付属病院にはその最先端治療を求めて全国から患者が訪れます。

治療には1～2ヶ月の期間を要することとなり、遠方から通院される患者さんの場合は、病院近隣の宿泊施設から毎日通院するなど、滞在費用が経済的負担になることも少なくありません。さらに治療が長期間にわたることから、患者に付き添う家族の精神的負担も大きく、大変な苦勞を伴うこととなります。

それらの経済的・精神的・身体的負担が少しでも軽くなり、我が家のようにホッとできるプライベート空間の提供を行い、病気と闘う子供や家族に安らぎをという思いからこのキッズハウスプロジェクトが発足しました。

2 手段

取組内容

・小児がんと陽子線治療について

陽子線治療は放射線治療の一種で、正常な組織への影響を軽減できる治療法として成人に対しては厚生労働省によって先進医療に認定されています。

全額自費負担となりますが、国内の複数の病院で実施されており、年間約3000人の患者が治療を受けています。小児がんは成人のがんに比べて放射線治療の効果が高いものの、周辺の正常組織や骨に対する副作用の可能性も高くなり、晩期障害が長年の課題とされてきました。放射線治療において、陽子線治療は「がん病巣を狙って照射できる」という利点がある為小児がんへの有効利用が認められ、現在は保険診療として認められています。

・筑波大学付属病院の陽子線治療

筑波大学付属病院では1983年から陽子線治療の臨床研究を開始、2008年に先進医療として承認を受けてから、これまでおよそ7000人以上の治療を行ってきました。

陽子線治療センターは筑波大学付属病院に併設されている施設であるため、外科や内科など様々な分野の専門医師や医療スタッフと密接な連携を取りつつ、複合的な観点から最適な治療法をチームで提供できることが大きな特徴です。

こうしたバックグラウンドを活用し、積極的に小児がん患者の治療を行っています。

・一誠商事株式会社は、茨城県南エリアを中心に11店舗で不動産ビジネスを展開しており今年創業50周年を迎えました。創業以来、社会や地域に対して貢献することを理念に活動しており、2016年にスタートしたこのプロジェクトでは小児がん患者とその家族に滞在施設を提供しています。病院から徒歩5分の1K（約26㎡）アパートを家主から一誠商事が借り上げ、治療期間中1泊1,500円で提供。入居中の住まいのトラブルにも対応しています。

水道光熱費も一誠商事が負担し、インターネットはもちろん、室内にはエアコン、テレビ、冷蔵庫、レンジ、コンロ、ドライヤー、掃除機、寝具、洗濯機、洗濯用品、電子ケトル等の家具家電・生活用品一式の備品が設置され、着替えだけあればすぐに利用ができるよう整えてあります。



一誠商事 & 筑波大病院

キッズハウスプロジェクト

筑波大学の先進的な医療を求めて遠方より来院し治療を受ける小児がん患者さんとそのご家族に対して、病院近隣の宿泊施設を低価格で提供します

- 別棟病院に隣接した民営アパート
- 暖気・ガス・水道、室内設備等は無料利用可
- インターネット専有設備
- プライベートな空間でのんびり
- 入居中は管理会社が24時間対応

キッズハウスの利用について

- ①対象となる方
小児がん患者さんとそのご家族(担当医が利用を認めた方)
- ②利用期間
・最大2ヶ月(8週間)
・以下の場合、延長利用が可能
【空室がある場合、待機者がいない場合】
- ③利用料金
1日あたり1,500円(税込) * 駐車場利用の場合は1,600円(税込)
上記に加え、利用日数に問わずクリーニング代1万円(税込)
- ④注意事項
- 部屋数に限りがあるため、希望者多数の場合はご待機に過ぎない場合があります。
- 治療開始日が決まり次第、契約が可能です。
- 前の入居者の退去後、7日間のクリーニングの後に、次の入居が可能となります。

2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

2022年10月末現在
総戸数5部屋
室内の備品関連初期購入費用約20万円
年間ランニングコスト約300万円

企業として利益を社会に還元し、長期的な視野でこの問題に取り組み、向き合っていく事で、将来にわたり企業も成長できるものと考えています。

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

※アパートを所有の家主様
※患者様窓口
筑波大学付属病院 小児総合医療センター 成育支援室
※受付窓口
一誠商事(株)営業企画課
※入居前後の清掃・備品準備
スマイルサポート（一誠商事グループ会社）
※入居後のサポート
一誠商事(株)賃貸管理部

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

ドナルド・マクドナルド・ハウスのような全国規模で展開している患者家族滞在施設がありますが、茨城県ではまだ少数です。
その為、茨城県つくば市にも滞在施設があることをまずは広く知っていただきたいと考えています。

その他

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

2016年に始まったこの取り組みは、現時点（2022年10月末）までに105組の家族に利用いただきました。

利用されたご家族から感謝のお手紙を頂くこともあり、プロジェクトのやりがいを感じています。

— 6月1日から入居をしたご家族の声（埼玉県在住 4歳患者様のご家族） —

埼玉県の川口市から往復5時間かけて車で通院していました。車内で飽きてしまわないように、車の中でできる独自の遊びをするなど、いろいろと工夫をしながら通院の時間を乗り切っていました。通院に要するガソリン代も、キッズハウスの1日利用料金よりも高くなり費用負担となるので、こうした施設があると経済的にも助ります。家とは少し違った雰囲気が気に入ったのか、子供もここでの滞在をとても楽しんでいるようです。徒歩で通院できるようになったので、通院の際のストレスが減り、私も子供もゆったりとした気持で治療に臨んでいます。通院時間が短縮されたことで、時間的にも体力的にも余裕ができたので、「治療前後の空いた時間を利用して公園遊びをしようね」と約束しました。楽しみながら治療期間を過ごせそうなので、とてもうれしいです。

<https://www.issei-syoji.co.jp/news/khp20210118/>

今後の展望

これからも遠方の患者さんや家族にとって精神的・経済的・身体的な不安を解消するものとなるよう、積極的な運用を筑波大学附属病院と共に行っていきます。

また、今回のSDGsアワードに参加する事により、病院関係者以外の一般の方にも知っていただく機会となり、所有のアパートの1部屋を滞在施設として提供したい・一緒に活動したいと思っていただける家主様を多くお迎えする事ができれば、提携病院を拡充し、病気と闘う子供たちや家族の受け入れをもっと増やすことも可能となります。

誰一人取り残さない世界の一助となるという課題に向けて一人でも多くの方にこのキッズハウスプロジェクトを知っていただき、持続可能な社会の実現に向け、子どもたちの未来のため安心できる暮らしを提供してまいります。

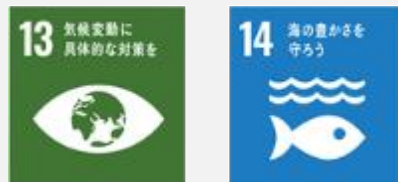
つくばクラフトビアフェスト2022プラカップゴミゼロの取り組み

1 目的

解決を目指す課題

課題 イベント等で使われるプラスチックカップの焼却・廃棄ゼロ
内容 ■ 各地で実施されるクラフトビール等のイベントでは、一回数万個のプラスチックカップが利用され、そのほとんどが焼却または廃棄されており、焼却時のCo2排出や海洋へのプラスチックごみ流出などが問題となっている。

関係が深いSDGsゴール



■ ゴミ削減の取り組みは、運営者や出店事業者まかせとなっており、安価なプラ容器の使用が拡大している。



1回のイベントで数万個の使い捨てカップが廃棄・焼却

解決を目指すに至った背景

- 「つくばクラフトビアフェスト」は全国のクラフトビールが茨城県つくば市のつくばセンター広場に結集する人気のビアフェス。
- 2012年から毎年開催していたが、2020～2021はコロナ過の為に中止していた。
- 前回開催の2019年では環境への負荷低減のため、ゴミを減らす施策を導入、リユース可能な「森のタンブラー」を導入し、多くの方にご賛同いただき、結果数トンのゴミを削減することができた。
- 2年ぶりの本年は更に取り組みをパワーアップし、「100%循環型ビールイベント」を目指して計画・実施することとした。



2 手段

取組内容 Reduce & Upcycle で焼却プラカップをゼロへ

プラカップの焼却ゼロを目指した運営実施

- (1)「森のタンブラー」「ECOFeel CUP」をリユースカップとして活用し、徹底的にリデュース
- (2) やむなく使う使い捨てプラカップは回収し、アップサイクル

①リユースカップによるReduce

リユースカップおよびマイカップを**全来場者**へ導入。
デポジット500円。返却せずに持ち帰ってもOK。



②マイカップによるReduce

オリジナルデザインを販売。
ECOFeel CUP 1,000円、森のグラウラー 2,000円。



③使い捨てカップの回収洗浄によるUpcycle

「飲み比べセット」などでやむなく使用するプラカップについては**素材を統一**。
回収洗浄しアップサイクル。**焼却しないことでCO2を固定化**。



複数素材が混ざるとリサイクルできないためPP製に統一

プラカップ再生PP



超大型3Dプリンターで
アップサイクルスツール



2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

費用	金額	売上	金額
アルバイト人件費	178,362	ゴミ削減企画運営費	50,000
ブース製作物	220,000	オリジナルカップ販売	303,000
消耗品	6,500	リユースカップ販売	835,000
運送費カップ	40,000	各種広告宣伝費	250,000
運送費備品	22,000	合計	1,438,000
運送費戻し	30,000		
ECOFeel仕入れ	421,500		
森タン仕入れ	87,450		
ECOFeel廃棄・リサイクル(傷・変形)	90,000		
森タン廃棄(傷・変形)	5,300		
合計	1,101,112		

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

- 主催 つくばクラフトビアフェスト実行委員会
- 共催 つくば市（つくばペデカフェプロジェクト）
つくばセンター地区活性化協議会
つくばまちなかデザイン株式会社
- 共創パートナー
 - ・ J F E スチール株式会社（ECO Feel Cup 供給）
 - ・ パナソニック株式会社（森のタンブラー供給）
 - ・ 株式会社浜田（プラカップ回収洗浄・ゴミ組成調査）
 - ・ 三井化学株式会社（プラカップアップサイクル：イス製造）
 - ・ ホテル日航つくば（リユースカップ洗浄）
 - ・ アサヒユウアス株式会社（全体プロデュース・アップサイクルステーション運営・リユースカップ運用）

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

公式HPに分かり易く事前告知を実施し、来場者だけでなく他のイベント企画者にも横展開頂けるよう、スキームを明示。

本年の取り組み

今回は100%循環型を目指し、全てのご来場の皆様にリユースカップをご利用いただく仕組みを導入いたします。また、飲み比べセットのようなどうしてもプラカップを使用しなくてはならないメニューについては、プラカップ及び関連ゴミをアップサイクルすることによって、焼却によるCO2を削減いたします。

リユースカップ	繰り返しのご使用可能です。
プラカップ	センター広場で利用可能なグッズにアップサイクルします。

当日のしくみ①リユースカップ

1. お越しの際に「アップサイクルステーション」にてリユースカップをお受取りください。その際にデジタルとして500円が必要となります。
2. リユースカップ（飲み比べセットはブルーリーからプラカップで提供）もしくはマイグラスなどをご使用し、ビールをお楽しみください！
3. お帰りの際はカップを返却（500円が返却されます）、もしくは記念品としてお持ち帰りください。

その他

- アップサイクルステーションを設置し、来場者への意識喚起を実施。
- 回収後アップサイクルイメージを体感できるようイス展示も併設。



3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

- リユースカップおよびマイカップの合計展開数は5,686個（マイグラスの持ち込みはカウント外）
- 3日間での焼却プラカップ削減数 約35,000個 CO2換算で約2.6トン（製造～輸送～焼却まで）
- 回収プラカップ全体量は約35kg。そのうち指定PP製が約30kg。
⇒回収プラカップはアップサイクル。
当初想定の1/3程度であり、リデュース取り組みが一定の成果を上げることができた。
- 取組み成果を共創パートナーとも協力し、様々な場面で共有・情報発信していくことで、多様な関係者や多くの地域での取組みにも繋がるものとする。

	リユースカップ展開数			オリジナルカップ販売数
	貸出数	返却数	販売数	
森タン	951	686	265	森タン 69
ECOFeel	4,381	2,976	1,405	ECOFeel 180
合計	5,332	3,662	1,670	森グラ 27
				合計 276

	プラカップ削減数
リユースカップによる削減	28,668
飲み比べプラカップ回収	6,700
合計	35,368

※全ブルワリーの売上金額より推定

今後の展望

- デポジットの仕組みを改良し、人的リソースを削減する。
※少ない人数で運営できるように



- 2022年度のごみ調査結果を参考に、ビール用カップだけでなく、フード用の容器のごみ削減にも着手。まずは量が多かった「プラトレ」に着目。
- カトラリーについて、生分解性のポリ乳酸（PLA）製のカトラリーを使用し、回収とバイオガス化による資源循環を目指す。



多種多様な容器が大量に廃棄・焼却

「自分のまちを知ることから始める自助・共助」 ～視角を変えた防災意識～

1 目的

解決を目指す課題

- ◇目的
 - ・防災をテーマとした地域活性化
- ◇課題
 - ・近年多発している災害、また、今後想定される災害に対してタニゴト化し公助の意識が強い地域の意識低下
 - ・コミュニティ不足が進んでいる地域の未来不安
 - ・高齢化社会へと進む中、日中一人の高齢者や障害者が住み良いまちづくりが必要
 - ・子育て世代と団塊世代の地域思考のギャップ
 - ・防災経験や知識を近隣地域、または遠方知人へ発信することによる知識の共有
- ◇SDGs関連
 - 1番 (1-5,1-3-1,1-5-1,1-5-2,1-5-3,1-5-4)
 - 2番,3番,4番,5番,11番 (11-5,11-b,11-b-1,11-b-2,11-5-1,11-5-2) 13番 (13-1-2,13-1-3)

解決を目指すに至った背景

- ◇経緯と背景
 - ・2019年10月台風19号によって浸水被害を受けた居住地域を見返してみると、当時のハザードマップでは浸水予想エリア外となっていることがわかり、消防団として、地域住民として何か出来ないかと考え始める。その様ななか、防災士を取得し地域のため活動が出来るのではないかと思い防災士を取得。地元住民、消防団の強みを活かし、地域の方と連携しやすい状況を作ることで、防災意識向上とコミュニケーションの向上を図り、住み良いまちづくりをつくる活動をするとともに、様々なまちづくり企画があるなか、自分が住み良いまちに住めてなければ他のまちの企画へも参加できないという気持ちも強い。



2 手段

取組内容

◇取り組み

- ・ハザードマップ作成
- ・地区防災計画書作成

①方法

・まず、課題（出動時・災害時の現状）を消防団へ共有。コロナ禍による活動縮小を迫られるなか、いつ起こるかわからない災害対策については活動を続けるべきと消防団と打合せ。

②主体

- ・地区長はじめ各常会長、消防団、防災士

③対象者

- ・上田中、下田中地区居住者

④時期・期間

- ・時期・・・2021年12月～
- ・期間・・・2021年12月～2022年8月

⑤場所

- ・現在のハザードマップを基に情報の整合性を自分の足で確認。
- ※確認事項（指定避難所までの道のり、各一時避難場所、消防設備等）
- ・確認した内容を両区・消防団へ伝達と確認
- ・意見交換を行い、地区ハザードマップへ落とし込み



2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

◇金銭的

- ・約60万（300部）

◇人的

- ・両区長、各常会長
- ・消防団
- ・防災士

◇物的

- ・打合せなどでの物的コストのみ（電気・文房具）
- ※持参で十分間に合う

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

◇ステークホルダー

- ・上田中、下田中区長、各常会長
- ・消防団
- ・市役所危機管理課、社会福祉協議会
- ・民生員
- ・関係機関（消防署、警察署）
- ・地元議員（県議会議員、市議会議員）
- ・育成会
- ・青年会

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

◇取り組みやすさ

- ・地元防災という観点からすると取り組みやすい→取り組むべき

◇協力

- ・関係各所（署）を巻き込むことは必須と考え、また、関係各所（署）も必要と考えているため協力を得られやすい

◇ポイント

- ・まち歩きから始めるため、真似しやすく理解しやすい
- ※経験者、出来る人を他地区からでも良いので巻き込むことが地域全体を良くするポイント（繋がりを作る）

その他

- ・地元キーマンの消防団へ協力を仰ぐことで、地域全体（子どもから大人まで）が動きやすい環境を作ることが出来たことと、スピードが上がったこと。
- また、自分たちで歩くことは必須！と考え、歩くことで災害以外の危険個所などが見付き、地域全体の防災へも派生し、住み良い安心なまちづくりが出来ている。

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

◇取り組みを実践した結果

・一般住民としては不明だった避難所の詳細、また、防災設備が地域全体へ周知できたこと。

また、公助から自助・共助への意識改革が出来た。

◇取り組みの成果

・田中地区に住んでいる住民だけではなく、その事例を職場・学校・親戚・知人へとアウトプットしていくことで市全体が良くなり、作成に携わっていただいた関係各所（署）がそのような課題が地域から上がった時に繋げることで波及効果があると感じます。

今後の展望

◇発展・進化

・年間を通した定期的な意見交換を行い、詳細のブラッシュアップを行う事と、実践的な避難行動も並行して行うことで、知識だけではなく経験値も上げていくことを計画している。

現在計画中（2023年2月予定）

内容……防災キャンプ（日帰り）

対象者…両区長、育成会

協力……消防団、青年会

S高等学校

つくば市危機管理課

消防署

警察署

詳細……上・下田中各児童館スタートし、指定避難所（S高等学校）まで徒歩にて避難、到着後にサバイバルメシ焚きを行い、スタート地点まで別経路にて上・下田中逆の児童館へ戻る。

※一部車いす避難を実施

メリット……実践的防災知識の向上

複数の避難経路の周知

子どもへの教育と保護者の協力意識向上

防災無線の実践

要支援者の課題共有

1 目的

解決を目指す課題

7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに



13. 気候変動に具体的な対策を



9. 産業と技術革新の基盤をつくろう



12. つくる責任 つかう責任



解決を目指すに至った背景

UniPo株式会社は、高性能且つ省エネルギーであるLED製品の設計・開発、製造、販売を一貫して行って参りましたが、近年、環境やエネルギーなどの問題が世界各地で発生し、解決しなければならない状況である事は周知の事実です。

これに応じて日中企業様と提携して、日中のお客様に環境にやさしいフッ素化学品をはじめ、中間体、医農薬品などを提供するサービスを行っております。

更に、事業を拡大し続けており、各種専門機器などの輸出入業務を展開し、化学品のカスタマイズも取り込んでおります。弊社は輸出入・販売を中心として国内外で産業の発展と人々の生活向上に向けた貢献を図っております。

2 手段

取組内容

7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに / 13. 気候変動に具体的な対策を

GWP（地球温暖化係数）の低いガスとして開発された高純度特殊ガスCOF2等の利用促進、販売。

水銀を使用しないLED照明は、従来の蛍光灯と比べて環境に良く、寿命は従来の白熱電球の約40倍、消費電力は8分の1と省エネに貢献。

オゾン層を破壊しない、且つ温室効果の低い特性を持つ新世代冷媒や、発泡剤の利用促進、販売。

9. 産業と技術革新の基盤をつくろう

有機合成実験・分析に必要な様々な実験設備を整えている機関と連携し、実験室レベルでの研究・開発を迅速に遂行、既存事業の活性化・新事業の可能性をご提案。

12. つくる責任 つかう責任

中古機械の輸出入業務代行を通じて、3R：Reduce, Reuse, Recycleの促進と実現。

2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

商材開発、製造費用。

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

国内のみならず、中国、アメリカと連携。
一般家庭から企業、学校、様々な施設向け商材の開発。

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

商材を選んで頂く事で、地球環境に貢献可能。

その他

Home Page に併せ Facebook Line Twitter も
利用可能にし、情報を発信、共有。

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

●環境に良い商材●

GWP（地球温暖化係数）の低いガスとして開発された高純度特殊ガスCOF2等の提供を実現。

水銀を使用しないLED照明の寿命は、従来の白熱電球の約40倍、消費電力は8分の1と省エネに貢献。

オゾン層を破壊しない且つ温室効果の低い特性を持つ新世代冷媒や発泡剤の提供を実現。

今後の展望

地球環境により良い製品の存在の発信の強化に加えて、それを選んで下さるお客様への支援があるように取り組ませて頂く事により、産業の発展に併せて、未来の地球そして人類の為ににより良い環境を残してあげられるよう尽力致します。

また今後は、感染症の状況を十分に考慮して、SDGsに貢献する情報を提供できる場を設けられれば嬉しいです。

子どもを見守る目を増やす地域活性化子ども食堂事業

1 目的

解決を目指す課題



【貧困をなくそう】家庭の経済状況によって生まれる『困り事』の解消



【飢餓をゼロに】給食以外では十分な食事を得ることができないでいる子供の栄養問題の解決



【健康と福祉を】外からは見えない家庭問題を身近な地域で見つけ自治体や団体に繋ぐ地域セーフティネットの拡大



【質の高い教育をみんなに】経済格差によって生まれる『体験格差』の解消と将来の選択肢につながる出会いの機会の提供



【住み続けられるまちづくり】地域運営の担い手となる若年層の発掘、消防団との連携による自助・共助の推進

解決を目指すに至った背景

持続可能な人類の発展において重要なのは「人材の育成」である。特に、成長し、未来の主役になっていく子供たちを、健康で、自信と思いやりにあふれる人に育てることが最も重要なゴールであると考え、これまで子供向けの食育教室を運営してきた。しかし「親が食に興味がない家庭の子」「経済的にゆとりがない家庭の子」には届かず、そんな子にリーチする策を見出せないまま可能性を模索してきた7年間だった。

コロナ禍の影響で経済格差がますます広がり、給食がない日は満足な食事を得られない子どもが増えているという情報に触れる中で、今こそ大人として何かしなければ、次世代が健全に育たないと感じ、地域の大人と子どもが接する機会を作り、地域社会で子どもを育てる古き良き日本の子育て環境を取り戻すことを目的とした活動をスタートした。

それが「こちらから子どもたちの元へ赴く移動式子ども食堂」である。

2 手段

取組内容

①方法：『移動式子ども食堂』を中心とした地域交流イベントの企画・運営

- ・キッチンカー事業者に食事提供を委託し、安心安全でおいしい食事を子供に無料提供する子ども食堂を企画、運営。
- ・ドローン操縦体験やクラフト体験など、子供向けのワークショップを同時開催し、「貧困家庭の子供向け」という子ども食堂のネガティブなイメージを一掃し、楽しくおいしい子供フェスを構成している。子供同士が楽しそうだから行こうぜと誘い合って参加し、その中に本当に支援を必要としている子がいることを理想とする。また、習い事ができない家庭の子供たちにも「興味関心に応じた体験学習の場を提供する」目的をも同時に果たすものである。
- ・イベント当日は地域の消防団や区長、協議会の方にも運営に加わっていただき、ファミリー層との交流のきっかけを作り、街の運営に向けた人材発掘と確保の場としての機能も果たす。

②主体：移動式子ども食堂2.0（つくばR8アイデアソンメンバー）

周辺市街地活性化を目的として集まったメンバーで構成された事務局が中心となり、今年度は高見原地区協議会と連携し、地域活性化のイベントとして活動している。来年度は市全域にフィールドを広げる。事務局は引き続き存続し、仲間を集めながら規模拡大を図る。

③対象者：つくば市在住のファミリー層と子どもを支援したい人

食事の無料提供は中学生と妊婦だが、大人も有料で購入することができる仕組みのため、地域交流を希望する人なら誰でも参加可能。また、運営から一方的に提供するというよりは、希望者には運営に参加してもらい、共に作るまちづくりを目指し、企画を進める。

④時期・期間：無期限（2023年からは月1回以上定期開催予定）

給食がない土日を中心に定期開催予定。3月からはなないうクリニック様での定期開催が内定。

⑤場所：つくば市全域

キッチンカーを活用する特性上、活動エリアは無制限。移動式の強みを活かし、つくば市全域で子どもを見守り育てる体制を作り上げていきたい。

2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

【金銭コスト】一回につき平均 5 万円（100食提供想定）
※つくば市からの事業委託金と、企業・個人スポンサーからの協賛により対応

【人材コスト】主催者 1 名と場所提供者で実施可能。ワークショップは提供者が主体となり、主催側は積極的な関与はしない仕組みのため基本的に人手はかからない。

【物的コスト】参加予定人数に応じたキッチンカー、駐車場などの会場、雨の場合に備えた簡易テント

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

- ・地区協議会メンバー
- ・各町内会の区長、班長
- ・つくば市役所の皆様
- ・地元企業（スポンサー、協賛）
- ・大学生（イベント企画運営）
- ・小・中学校（スクリーンアプリでの告知、チラシ掲示）
- ・つくば市消防団
- ・その他、活動に協力してくれるボランティア

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

- ・キッチンカーを活用することで調理スキル・許可不要
- 衛生面ですでに保健所の許可を得ている事業者へ委託することで、コロナ禍でも影響を受けにくい企画運営が可能
- ・初期投資・固定費が不要
- マッチングがメイン事業であり、資金面で負担が少ない
- ・地域を限定しない

- ・運営側に過度な負担がない
- イベント期間も受付のみで稼働できる仕組みのため人的負担が少ない

その他

持続可能な取り組みを考えるにあたり、誰かに過度な負担がかからない仕組みが重要であることは言うまでもない。

金銭面では社会貢献に興味がある人を募ったところ多数提供申し出があった。子ども食堂というわかりやすいネーミングをあえて活用する意味がここにある。

人的面においても、運営側にはほぼ負担がない仕組みである。社会貢献を気軽に、軽やかに行う先駆的例として、ぜひ取り組みを応援していただき、そのことで社会のために活動する人を増やすきっかけにしていきたいと思う。

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）



【貧困をなくそう】10%

根深い問題を解決するために自治体、協力者とのつながりができた。



【飢餓をゼロに】10%

参加できる子供の人数枠をさらに増やし、開催場所を増やすことで来年は50%を目指す。



【健康と福祉を】20%

地域住民が中心となって活躍できるイベントの横展開可能なモデルができた。



【質の高い教育をみんなに】50%

アンケートでワークショップは非常に好評だった。大学生にも協力いただきながら今後も体験学習を届ける。



【住み続けられるまちづくり】70%

消防団との防災イベントをブラッシュアップしながら今後も継続していく。

今後の展望

・積極的な告知宣伝活動

本当に支援を必要としている子供にも参加してもらうためには、学校や自治体の協力が不可欠であるが、まずは市民の皆様にごこの活動を知っていただき、気軽に足を運んでもらうことで口コミを発生させたい。まず私たちの活動を知ってもらうための告知宣伝活動を、仲間と共に積極的に行なっていく。

・固定型子ども食堂との協働

移動式子ども食堂でつながった子供たちに地域にある子ども食堂を紹介し、安定した居場所で安心して育つ環境作りを行いたい。そのため、子ども食堂運営団体との協力体制を作り上げていきたい。

・大学生と地元企業をつなげる場所へ

日本の出生数が減少する中、企業の人材確保が困難になりつつある。活動に参加してくれる優秀な大学生とスポンサー企業がつながる機会を提供する。大学生には将来の選択肢を、企業には欲しい人材との出会いが生まれ、地域産業が持続する一助となることを期待しながら、交流の場を設けていく。

「日常に+αの工夫で地球を変える行動を」

1 目的

解決を目指す課題



多くの団体はある課題を解決するために様々な工夫をしつつ活動をしていると思います。しかし、SDGs aは一つの課題を設定しているわけではありません。個人個人が解決したいと思った課題をSDGs aのメンバー全員でブラッシュアップし、その課題を解決するためにSDGs aとして取り組めることや取り組むべきことを考えています。

上に貼った7個のSDGsのゴールは今までの1年間にSDGs aが達成に貢献したゴールです。17個あるゴールのうち7個のゴールの達成に貢献できたことが示しているように様々な課題にSDGs aは取り組んでいます。

今まで取り組んだものとしては主に四つです。ペットボトルキャップ回収、古紙回収、カイロ回収、ウクライナ支援募金です。それぞれについては次のページで詳しく説明します。これらはすべてSDGs aのメンバーからの発案で始まった活動です。

このようにSDGsは私たちに解決できる、私たちだからこそ解決できる全ての課題に取り組み、解決したいと考えています。

解決を目指すに至った背景

もともと各個人では社会貢献活動に対する興味がありました。また、個人個人で活動をしている人もいました。しかし、自分一人だけだと活動を始めるのに抵抗があったり、いざ始めてみても学校全体を巻き込む活動は難しかったり、大きな活動はすることが出来なかったりしました。そんなSDGsに関する活動をしたいのに一人だとできない！という人たちと一緒に活動が出来たら活動範囲がお互いに広がり、大きな活動が出来ようになり楽しいのではないかと思いSDGs aを立ち上げ、活動を始めました。そうやって始まったSDGs aなのでこの中には自分でしたいけど一人じゃできない活動を抱えている人はもちろん、特定のしたい活動はないけど社会貢献活動を何かやってみたいという人も沢山います。私たちは、SDGsの解決に向けてだけでなく、さらに、それぞれの「やってみよう！」という気持ちを大切に活動しています。また、SDGs aを立ち上げた理由はもう一つあります。それは今それぞれが行っている活動をその人が卒業しても校内やそれより広い範囲で続けていきたい(いつまでも)という思いを持っていたことです。SDGs aは並木中等の全年次対象の有志団体です。だから、この団体を立ち上げることで自分たちが始めた活動を後輩たちに引き継いでもらうことが出来ます。一人じゃ踏み出せない一歩をみんなの力で踏み出せるようにすること、私たちの代だけで沢山の社会貢献活動を完結させないこと、それがSDGs aの活動を始め、SDGsの課題の解決を目指すに至った背景です。

2 手段

取組内容

ペットボトルキャップ回収、古紙回収、カイロ回収の三つを現在主に行っており、7月ごろにはウクライナ募金を行なっていました。

ペットボトルキャップ回収

キャップ回収は全校生徒を対象に行っています。各クラスなど校内の29か所にキャップ回収のボックスを設置してペットボトルを捨てる時にキャップを分別して捨ててもらえるようにしています。この活動はSDGsの最初の活動で今も続けている活動です。最初は学校に関するアンケートでキャップを一票として投票できる仕組みを作ることで回収量を増やしました。この活動はポスターを貼り全校生徒に周知することを大切にしました。このことで生徒や先生方の中では家庭で集めてそれをまとめて沢山持ってきてくださる人もいました。そして今年度に入ってからは回収ボックスが設置されていることが生徒先生方の中で「景色」として認識されてしまっていてキャップの回収量が減っていたため10月末に「キャップ回収デー」として朝の登校の時間に昇降口でキャップ回収をしました。9月下旬に保護者あてに学校でキャップ回収をする日を設けることをお知らせする文書を作り配布し、家庭で1か月間ペットボトルキャップを集めてもらうことにしました。当日は沢山の生徒先生方が持ってきてくださり、1日で約8000個のキャップを回収することが出来ました。キャップ回収は今までで約70,000個回収しています。これはワクチン約50人分に相当します。

古紙回収

今年の1月ごろから回収を開始しました。並木中等ではゴミの分別があまり行われてなく、掲示期間のすぎた掲示物なども可燃ごみとして捨てられていました。そこでつくば市様に相談したところ、つくば市の古紙の回収袋をいただくことができ、それを各教室など校内25箇所に設置することにしました。回収袋に入れられた古紙ごみ、段ボールごみ、シュレッダーごみなど全て合わせ、2022年11月時点で約3200kg余りをリサイクルすることができました。当初は元々学校に来ていたごみ処理業者に回収していただいていたが、4月ごろからは学校に相談した上で美濃紙業株式会社様に自分たちで連絡をした上で買取をしていただくことになりました。買取をしていただいたことで得られた収益は少額ですが森林保全団体等に寄付をしました。

カイロ回収

カイロ回収は全校生徒を対象に昨年度の1月から始めました。カイロは回収して大阪府に会社がある「Go Green Group 株式会社」様に送ると水質改善に効果がある「Go Green Cube」に作り替えてくれます。これはカイロの中に含まれている二価鉄イオンを有効活用したもので水質改善に効果があると証明されています。昨年度は1月から3月上旬までで約1400個集めました。今年度は同じ茨城県にある県立竹園高校のSDGsサークル様と協力して行っています。昨年度も行ったためか、今年度はこの時期から沢山の人がカイロを持ってきてくださっています。今年度は並木中等だけで3000個、竹園高校と合同で4000個を目標に回収を進めていきます。

ウクライナ募金

ロシアウクライナ戦争によってウクライナでは民間人が被害に遭っている一方、時期が経つにつれ日本ではあまり報道されなくなっていくため、少しでも多くの人にこのことを考えてほしい、少しでもウクライナの方々の力になりたいという思いから校外で一般の方々を対象に募金活動をしました。これはSDGsだけではなくCTW(Change The World)という国際関連の活動をしている学校内の有志団体と共に行いました。また、募金先はウクライナの軍事費に活用してほしいのではなく、民間人の救済に使ってほしいと考えたので国連難民高等弁務官事務所のウクライナ緊急支援募金に募金することにしました。BLANDつくば並木店様に協力していただき、敷地内で募金活動を行わせて頂くことができました。放課後に2時間程度を2回行い中高生が募金活動をしているからということもあり多くの方々が募金をしてくださり、わずか数時間の活動にもかかわらず、28000円もの額を募金することができました。

2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

キャップ回収 回収ボックス（校内で出たプリンターインクの箱のごみを再利用）
週に一回程度回収ボックスからキャップを回収する人
古紙回収 回収袋（つくば市から頂いた）
回収業者 美濃紙業株式会社様（無料で来てくださっている）
たまったら回収袋から学校の倉庫に古紙を回収する人
カイロ回収 回収台（学校で使わなくなった機の再利用）
送料
週に2回程度回収台からカイロを回収する人
ウクライナ募金 回収ボックス（使わなくなった段ボールから自作）
学校の旗など
BLANDEつくば並木店様の敷地（無料で貸していただいた）
合計15名程度の並木中等の生徒

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

活動に協力してくださった方々
キャップ回収 並木中等の先生方、生徒
リサイクル業者（未定）
古紙回収 並木中等の先生方、生徒
つくば市生活環境部環境衛生課様
美濃紙業株式会社様
募金先の団体（未定）
カイロ回収 並木中等の先生方、生徒
Go Green Group 株式会社様
竹園高校SDGsサークル様
ウクライナ募金 募金活動に参加していただいたすべての方々
BLANDEつくば並木店様
日本UNHCR協会様（募金先）
その他 一般社団法人ACTPORT 入江遥斗様

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

私たちは「日常に+αの工夫で地球を変える行動を」をモットーに活動しています。今私たちが行っている活動は日常的に誰もが使っているものの回収が中心で少し気にかけるだけでだれでも参加できる活動です。例えばキャップ回収はペットボトルのゴミ箱の近くに回収ボックスを置き、ペットボトルを捨てる時に「キャップは分別しよう」と気かければ誰でも参加することが出来るようになっていきます。古紙回収の袋も特別教室も含め各教室に設置することでゴミを捨てる感覚で古紙回収に参加することが出来ます。これらは決して難しいことではなく、回収をする場所や回収したものを集める人、少しの勇気と努力さえあれば誰でも始めることのできる活動です。また、家庭などでも簡単にでき、活動の波が広がっていくことも期待できます。

その他

私たちの最大の魅力は「中高校生である」ということです。大人だとなかなか行動に移すのが難しいことでも私たちはすぐに先生に協力をしてもらったり全校生徒を巻き込んで活動したりすることで実行することが出来ます。また、企業の方々や他校の生徒の方々との協力も積極的に行うことが出来ます。SDGsは中高生ならではの柔軟な思考と発想、大きい行動力で難しい社会環境問題にも立ち向かっていきます。

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

SDGsaは昨年秋頃から活動を始めました。そこから1年間主に並木中等内で活動を行ってきました。

主な活動の成果は以下のとおりです。

キャップ回収 約70,000個のキャップを回収

→約70人分のワクチンに

古紙回収 約3200kgの古紙ゴミをリサイクル

カイロ回収 1425個のカイロをGo Green Japan Groupに寄付

ウクライナ募金 28000円をUNHCRに寄付



以上のような目に見える成果を残し、社会に微力ながらも貢献することができました。しかし、SDGsaとしてはそれ以上にこれからも並木中等でこのようなSDGsの達成に貢献ができるような活動が続くものとなる第一歩を踏み出したことが最大の成果だと考えています。それぞれが活動をしていく中で一緒に活動できる仲間を見つけるため、これからの並木中等でも活動が続くようにするためにSDGsaは立ち上げられました。SDGsaとしてまだ一年ですがこの二つの目的をかなえられたのが最大の成果です。

また、SDGsaは「日常に+aの工夫で地球を変える行動を」モットーに掲げています。私たちがSDGsの宣教師として気軽に地球を変えられるような行動ができる環境づくりができたことも成果の一つだと思います。私たちの活動に参加してくれた生徒たちが家でも同じようなことをやるなど+aの行動の連鎖が続くことが期待できます。

今後の展望

SDGsaはこれからもSDGsの達成に少しでも貢献できるよう、活動を続けていきたいと考えています。現在は校内での活動が中心となっていますが、並木中等内で活動するよりつくば市などの行政、つくばSDGsパートナーズに登録している団体、企業などをはじめとした校外の方々とも連携、協力をして活動をしたいと考えています。校外にも活動の幅を広げることで自分たちの活動を知ってもらいもっと多くの場所で同じような活動が行われることを期待しています。その第一歩として取り組み内容の項目でも紹介しましたが、今年度は竹園高校SDGsサークル様と共にカイロ回収を行うことになりました。また、校内の有志団体であることから学校を卒業すると同時にSDGsaでの活動も終わってしまいます。SDGsaはまだ2年目の若い団体ですが、これから自分たちが卒業しても、今メンバーとして共に活動している中学生が卒業してもSDGsaの活動が続いていくように、このような活動を廃れさせないようにするためにも、現在している活動の意義や目的、必要性を校内で伝えていきたいです。

また、現在の行なっている活動をさらにパワーアップさせ「NAMIKI PRIDE PROJECT」というブランド化をすることでさらに多くの人に活動に協力していただきたいと考えています。シリーズとしてキャップ回収を「NAMIKI PRIDE CAP」、古紙回収を「NAMIKI PRIDE PAPER」、カイロ回収を「NAMIKI PRIDE KAIRO」とする。例えば、ただ裏紙をリサイクルするのではなく、「NAMIKI PRIDE PAPER」とすることで裏紙を使用する人に誇りを持って使用していただきたいと考えています。この「NAMIKI PRIDE PROJECT」を学校のSSH成果報告会で発表し、実行に移していきたいと考えています。また、現在は物を回収し再活用させるということを中心に行なっていて、今後さらにいろんなバリエーションの活動をしていきたいです。

やさしい日本語で防災かるた

1 目的

解決を目指す課題

今後いつ起こるかわからない、震度6以上の地震、気候変動による豪雨、洪水といった災害に対し、だれもが自分ごととして、防災対策を行い、安心な生活を送れるよう、防災意識の向上と防災についての知識を深めることを課題とする。この課題解決のため、学校や自治会、いろいろな場で、日本人も外国人も一緒に学べる機会が必要である。それには、学びやすい教材が必要である。また、コミュニケーション構築も重要であり、子どもから大人まで、また外国人も一緒に楽しく学ぶ「誰一人取り残さない防災教育」が必要があると考えた。



日本人も外国人も誰もが理解でき、実践しやすい防災教育を目指したい。



防災意識を高め、できることから準備していくことにより自助、共助がはかられ、災害に強いまちづくりにつなげていきたい。



災害時に孤立しないためには日ごろのフレンドシップが非常に重要である。楽しく参加しやすい場を作り、仲間づくりにつなげていきたい。

解決を目指すに至った背景

昨年防災士として、外国人向けやさしい日本語で防災講座をオンラインで行った時、資料に多くの手書きイラストや写真を入れた。講座後に受講者から「イラストがわかりやすかった」との声をいただいた。イラストは視覚に訴えるので、文や声よりも理解しやすく記憶にも残ることが分かった。

今年も防災講座を依頼されたときに、どうしたら外国人も日本人も理解できる講座をすることができるか考え、かるたを作成することにした。かるたであれば、遊びながらやさしい日本語をつかうことで、日本人も外国人も、こどももおとなも同じかるたで遊ぶことができる。また、イラストの効果で、日本語がわからなくても内容を理解できる。地域で誰もが防災意識をもち、普段から防災の準備をしていくことにより、自助、共助のできる災害につよまちづくりにつながる。自分自身スイスに1年半暮らしていたことがあったが、付近に日本人のいない環境で孤立感を味わった。そんな時、時々スイスの人とおしゃべりの会にいれてもらったが、やさしい英語で話してくれると大変安心した。

それぞれの国の言葉で何種類も資料をつくるのではなく、やさしい日本語を用いることで、だれもが同じ場で防災について考え、発言することができ、協力しやすい環境をつくることではないかと考える。

2 手段

取組内容

- ①方法 5.7.5のリズミカルなやさしい日本語で読み札、わかりやすいイラストで絵札を作成した。
見やすいように、横9.5cm縦13.2cmの大判サイズにした。
読み札だけではどうして短くなってしまったので、適宜説明文も入れたが、多くはイラストのみで理解できるように努めた。
日頃のコミュニケーション作りが大切であることも入れ、毎日の日常生活が防災につながることを明記した。
- ②主体、防災士であり、日頃から日常生活で防災についてできることを盛り込んだ。
- ③対象者、日本人、外国人、子ども、大人 すべての人に遊んでもらえる内容にした。
- ④時期・期間、今年の8月頃から作成し、11月に完成した。
- ⑤場所 12月に学生中心のイベント、外国人対象のイベントで行う。



ほ いっする
いつもかばんに
いれておこう

ホイッスルは さいがいのときに、
あなたのばしょをしらせませす。いつ
ももっていきましょう。

Always carry a whistle. The
whistle will let everyone know
your location in case of
disaster.



へ るめっと
あたまをまもるよ
おちるもの

A helmet protects your head
from falling objects.

2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

大判無地かるた 2500円
ラベルシールA4 25枚 3000円～
プリンタインク 50枚カラー印刷（絵札）
50枚モノクロ印刷（読み札）

イラストは自身で作成したので時間的コストのみ

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

やさしい日本語で外国人と気軽に話す活動をしている「にほんごでおしゃべり！プロジェクトチーム」に防災講座を開催する機会をいただいた。

チームのメンバーである日本語の先生に、防災かるたを作成するにあたって、やさしい日本語になっているか、英語表記についても正しい英文かななどのアドバイスをいただいた。

つくば市国際交流協会にかかる印刷を2部お願いして、いろいろな場で活用してもらえよう数を増やした。

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

この「やさしい日本語で防災かるた」は、イラストはわかりやすく、読み札もやさしい5.7.5調で小学生から大人まで、また外国人もやさしい日本語だけでは足りない場合には英語表記も一枚一枚行っているため、学校や地域団体等だれでも遊べ、防災について考えたり、話し合うことができる。現在個人的に1箱、国際交流協会さんに2箱用意してもらっているため、誰もが借りて遊べるようにしていこうと思っている。

その他

防災かるたは他の自治体や団体でもあるが、やさしい日本語と英語が表記されているものはほとんど見当たらないようである。

基本的にはやさしい日本語で読み、わからない場合は英語も使う。この英語も中高生なら読めるような平易な英語を使っている。このかるたは誰もが参加できるように工夫している。

また重要なのは遊びの中で学べるということで、楽しい雰囲気の中で少しでもお互いが仲良くなる機会を作りたいと思っている。

災害はすべての人に起こりうることであり、その前の準備がどれだけ大切であるかを知ってもらいたいと思い作成した。誰一人取り残さない防災の取組みとしてこの防災かるたを多くの人に知って遊んでもらいたいと思っている。

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

何人かの外国人団体、日本人にも見てもらったが、イラストがわかりやすく、かるたとしてもあそびたくなるとのお声をいただいた。また防災について大切なことが網羅されているとの声もいただいた。12/1に学生中心のイベント、12/3に外国人対象のイベントで行い、防災について学んでもらう。また、ヒアリングも行い、今後の改善も考えていきたい。



今後の展望

つくば市は小学校にも外国人が多いので、小学校の防災教室などでも使っていただきたいと思っている。また、県の外国人の支援団体にも「借りたい」との希望をいただいているので、できればもっと印刷して多くの人に防災について学んでもらうと同時に、かるたを楽しんでもらうことをきっかけに、フレンドシップを構築してもらいたいと思っている。



「つくたび」プロジェクト

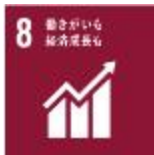
1 目的

解決を目指す課題

- 地域のにぎわい創出
関連するゴール：11、17



- ホテル業界、観光業界の人材育成への貢献（働きがい創出）
関連するゴール：8、9

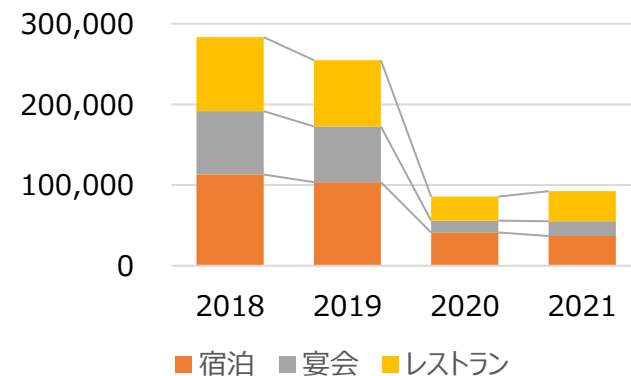


解決を目指すに至った背景

・コロナの感染拡大により、ホテルを利用するお客様が激減し、スタッフのモチベーションが下がってしまった。
お客様をもてなすことで、喜びを感じていたスタッフに、別の形で働きがいを感じてもらいたいと考えた。

・ホテルが位置する、つくばセンター地区は、商業施設や飲食店の休業や撤退により、以前のにぎわいが減少している。
ホテルが、地域の外からのゲストと地域を結ぶ接点として機能することにより、地域に域外からのゲストを呼び込み、更に、満足度の高い滞在をして頂くことで、リピータとして何度も足を運んでいただけないかと考えた。

コロナ禍前後のホテルご利用人数



2 手段

取組内容

◎『つくたび』プロジェクトとは

ホテルのスタッフが、地域の事業者との連携をしながら、ホテル内、外での体験プランを企画から運営までおこなうプロジェクト。地域の事業者との交流や地域をめぐること、地域の活性化に貢献するだけでなく、ホテルスタッフが一から企画をし、運営まですることで、熱意をもってプランに係わり、社員のモチベーションアップにつながる。プランに満足したゲストがリピーターになることで、地域のファンの増加にも寄与できると考える。



『つくたび』コンセプト ～あなたとつくるたび～
“つく”ばの魅力を感じる『たび』
ホテルとひとで“つく”る『たび』
地域とひとが結び“つく”『たび』

◎つくたび プラン実績（一例）

①～サイクリスト語り合ナイト～ 第2弾（10月8日実施）

目的：サイクリスト同士の交流の場の提供、サイクリングツアーで地域をめぐること、地域の魅力を参加ゲストに紹介

ツアー行程：9：00 ホテル出発 - 9：30ポテトかいつか（焼き芋の試食+ショッピング） -11：00筑波農場（田んぼで新米おにぎりの試食）

13：00つくばワイナリー（ホテルランチボックスとワイン試食） -ホテルへ送迎（自転車も一緒） -ホテルチェックイン

18：00～20：00 宴会場で懇親会『サイクリスト語り合ナイト』

プランの特徴 ホテルの自転車好きなスタッフがガイドとして一緒にサイクリングツアーに参加。



2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

金銭的成本
体験プランごとに収支を計算し、プランの販売を行う。

人的コスト
ホテルスタッフが通常業務とは別に、ミーティングや企画会議を行う。
プランごとに違ったスタッフが担当。自分の好きなことや得意な事を生かしたプラン作りをしていく。

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

地域限定の旅行業者や観光事業者、飲食店などと連携し、その魅力を十分に生かしたプランを企画、運営。
運営には、ホテルスタッフ、ゲスト、地域の人それぞれがそれぞれ交流し、親交を深められるような仕組みをつくる。
地元の人に愛着を持ってもらうことで、地域にまた来たいと思ってもらえるような企画を考えていきたいと思っています。

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

現在は、ホテルスタッフによる企画・運営が中心ですが、取り組みを発信していくことで、共感をえられた人や企業からのリクエストに応じ、協働することで、連携の輪を広げていきたいです。

その他

このプロジェクトは、コロナ禍で下がってしまったホテルスタッフのモチベーションの回復だけでなく、地域を巻き込んだ地域活性化だと考えています。
また、同時に、コロナ禍による、物質的な豊かさから心の豊かさへの価値観の変化に応じて、心が豊かになり、人と人が繋がれるような取り組みにできたらいいなと考えています。まだまだ始まったばかりのプロジェクトですが、皆さんの共感を得ながら少しずつ輪を広げていけたらいいなと思っています。

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

1. 地域のにぎわいについての影響

正直いいまして、何度かのイベントだけで地域が活性できたとは思いません。ただ、私たちのイベントに参加した方のアンケートなどを見ると非常に満足していただいております、何より、つくばで、このような取り組みが出来たことに感動していただいております。

今後、この活動を続けることで、確実に、ホテルだけでなく、地域へのファンをつくることできる感じています。

2. 働きがいの創出

体験プランの企画・運営に携わったスタッフは、ゲストからの反応を直接受け取ることができ、とても充実した企画運営をすることができたと感じてくれています。ただ、参加しているスタッフはまだ一部であることから、この取り組みを続けていくことで、多くの社員が同じような感情を抱いてくれるようになれば良いなと考えています。



今後の展望

地域とゲスト、ホテルをつなぐような企画を継続し、ホテル周辺の企業や団体、個人と協働しながらサステイナブルな旅や体験のあり方を模索していきたいと考えております。



「エコ・クッキング」の普及活動を通じた地球環境問題への行動アドバイス

1 目的

解決を目指す課題

課題

一般市民が、SDG s の実践や地球環境問題の課題解決につながる行動をする場合、下記の課題があると思われます。

- ・取組みメニューは多数あり、選択に困惑する場合があります。
- ・関連性の無い1つ1つの取組みでは、貢献度は微少に感じます。
- ・以上から、モチベーションや達成感を感じる事が困難です。

解決を目指す方法

エコ・クッキングは、地球環境問題の課題解決の種々の具体的な取組みを含むため下記の理由から、上記の課題解決に貢献できると考えます。

- ・普段の食生活が取組み内容のため、誰でも気軽に開始できます。
- ・エコ・クッキングの各取組みの貢献度は小さいかもしれないが、エコ・クッキングというパッケージで取組みの評価をすれば、達成感や貢献の満足度は上がると思われます。
- ・エコ・クッキングは教育効果が一層高まるプログラムであることが確認されています。

また、エコ・クッキングは、SDG s の下記の5つのゴールに当てはまります。



* エコ・クッキングは東京ガス（株）の登録商標です。

解決を目指すに至った背景

弊社は都市ガスというエネルギーを供給する会社のため、事業活動としてお客さまに省エネ技術などのノウハウを提案しています。

弊社グループでは、エコ・クッキングという社会貢献活動のメニューをもっています。また、お料理教室を実施することができるキッチン設備を備えた体験施設（クッキングスタジオ）もあります。

以上のことから、エネルギー供給のプロフェッショナルとして、市民の皆さまを対象にした省エネ活動であるエコ・クッキング教室を実施しています。エコ・クッキング教室では講義と調理体験をセットにして、楽しみながら学んでいただける環境を創出できると考えました。また、この活動を通じて、弊社は社会に受け入れられ、事業活動も継続可能と受け止めています。

2 手段

取組内容

①方法

エコ・クッキングの主な取組みは下表のとおりで、講義と調理体験を通じて、環境問題の理解および日々の実践のきっかけ作りを提供しています。また、教育プログラムに行動科学の知見を取入れることにより、教育効果が一層高まることが確認されています。

プログラム	主な内容	主な訴求内容	講義	調理体験
環境問題	地球温暖化問題、CO2削減目標、SDGs等	取組みが必要となる背景の理解	○	
実践編	買い物	旬の食材の選択、地産地消	○	
	調理	I礼ギ-の上手な使い方(火加減、鍋ふた、グリル活用等)、生ゴミの最小化のための野菜の切り方	○	○
	食事	食べ残しの予防の再点検	○	○
	片づけ	排水の量、汚れを小さくする方法 生ゴミの水分を少なくする方法	○	○

②主体

東京ガスネットワーク(株)つくば支店
なお、募集等の窓口は**つくば市**

③対象者、④時期・期間、⑤場所

③対象者	市内小学校5・6年生		つくば環境スタイルサポーターズさま
④時期・期間	2022年度	8つの小学校、13クラス、414名	2回(親子向け、大人向け各1回)、20名
	開始年度と期間	2005年度から開始し、今年度で17年目*1 *1: 2005~15年度; 旧筑波学園ガス(東京ガスに合併)、2016~21年度; 東京ガス、2022年度~; 東京ガスネットワーク(東京ガスから分社)	
⑤場所	各学校の家庭科室またはオンライン授業*2 *2: 新型コロナウイルス感染対策のため教室と弊社クッキングスタジオを繋ぎ双方向のライブ通信		弊社クッキングスタジオ

2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

- ・費用（主に食材費）
小学校：約100円/人（負担者：つくば市）
つくば環境スタイルサポーターズ：約200円/人（同：参加者）
- ・人的コスト
1回当り、弊社は4名（講師、実習師範）、つくば市1～2名、
学校（先生）1名
- ・物的コスト
特になし
∴主に既存の調理器具などを繰り返し使用するため

汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

前ページの「2 手段①方法」のとおり、一度、エコ・クッキング講座の体験や動画視聴などの機会があれば、誰でもすぐに気軽に実践できる取組みと受け止めています。
また、経験者や賛同者が家族や友人等にも広めやすい内容・取組みを意識したプログラム構成としています。

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）

- ・市
つくば市との包括連携事業の取組みの1つとして市が募集窓口および環境問題の講話をしてくださるため、SDGsの実行の呼びかけ、つくば市のCO2削減目標などが盛り込まれます。これにより、環境問題解決の取組みとして説得力がある取組みの1つとして受け止められていると考えています。
- ・小学校
先生の協力のもと、調理実習の準備、当日運営のご協力をいただき、効率的な運営が実現されています。
- ・つくば環境スタイルサポーターズさま
主に大人を対象としていますが、地球環境問題の課題解決について改めての行動のきっかけになっているとご意見もいただいています。

その他

- ・広報つくば2022年10月号（No.624）の8ページに、エコ・クッキングの概要およびつくば環境スタイルサポーターズさまの体験会の動画が紹介されました。特に、動画による訴求は、気軽にエコ・クッキングを知り、理解できるコンテンツになっていると受け止めています。
- ・小学校を対象とする授業について、コロナ禍においては感染対策のため、下記などの臨機応変な対応をしています。
 - ・オンライン授業（調理実習、試食なしの講義のみ）の導入
 - ・学校における調理実習の師範のデモでは、密を回避するために食材を無駄にしない野菜の切り方の手元などを教室の大型TVにライブで映して説明します。

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

- ・小学校
 - ・地球温暖化問題や地産地消などについて、学校授業での復習や理解促進の一助になっていると受け止めています。
 - ・実行動の乏しかった児童についても、エコ・クッキングの教育効果により、興味を持ち、理解と実践につながるとともに、こうしたSDGs 関連の教育機会を通じて、成長段階において身につけられていくものと受け止めています。
- ・つくば環境スタイルサポーターズ
 - ・主に大人と対象としていますが、地球環境問題の課題解決ついで改めての実行のきっかけになっているとのご意見もいただいています。このため、まだ少数ではありますが市民の皆さまの具体的な行動変容に結びついているものと受け止めています。
- ・実績（2016～2022年度の延べ数）
当該取組みの開始時期は旧筑波学園ガス(株)の2005年度からですが、実績は、2016年度（東京ガス(株)と合併）以降の集計としました。

対象	開催数	参加者数
市内小学校	62校	3,716名
つくば環境スタイルサポーターズ	10回	141名

今後の展望

まずは、当該取組みを継続することによって、エコ・クッキングの賛同者・実行者を増やしていきたいと考えています。
また、アイデアレベルですが、つくば環境スタイルサポーターズのように一般市民の皆さまを対象にした取組みを増やしていきたいと考えています。それによって、CO2削減目標に対して、より即効性ある貢献ができるものと受け止めています。弊社の活動を通じて、つくば市の「誰一人取り残さない」SDGs の目標達成の一助になればと考えています。

ご参考

エコ・クッキングの教育効果については、ガスや水の使用量、生ごみの廃棄量の削減につながることが確認されています。

○調査方法および内容

東京家政大学栄養学科3年生のうち、家庭科教職課程必修科目「食教育の研究」履修生、平成16年度49名。

○調査期間

平成16年度(平成16年4月～平成17年3月)の1年間とし、年度内に3回、同じ献立実習およびアンケート調査を行った。

○実習献立の選択(詳細は略)

実験のメニュー(ごはん・ダイコンの味噌汁・ダイコンと豚肉の味噌煮,6人分)を下表の期間で実施、比較。

○実験の結果(概略)

消費量・廃棄量

項目	教育前(基準)	教育から2～3ヶ月後	教育から8ヶ月～1年後
ガス	100%	58%	55%
水	100%	20%	22%
生ゴミ	100%	36%	41%

CO2削減効果(教育後は2～3ヶ月後)

項目	合計	生ゴミ	水	ガス
教育前	100%	17%	6%	77%
教育後	52%	6%	1%	45%

参考資料：石井克枝(監修),三神彩子(企画・執筆、以下同じ)生田目早苗,小林直子,酒井宏子,熊谷美智世,エコ・クッキング指導者教本(2022年4月),エコ・クッキング推進委員会

けんがくハロウィン

1 目的

解決を目指す課題

研究学園駅周辺地区（けんがく地区）が持つ課題

- ①けんがく地区では多様な団体が活動しているが、連携した活動が見られない。（目指すゴール→11-3,17-17）
- ②住民や活動団体と地元商店・企業との関わりが少ない。（11-3,17-17）
- ③昼間の駅前の賑わいが乏しく、美しく整備された広大な公共空間が有効に活かされていない。（8-3,11-7）
- ④学園の杜公園は個人の利用が多く、交流を生み出すような利用がされていない。（11-7）
- ⑤駅前飲食店街のポイ捨てが目立つ。（11-6,14-1）



- 8-3 中小規模の会社の設立や成長を応援する。
- 11-3 だれもが参加できる形で持続可能なまちづくり。
- 11-6 都市に住む人が環境に与える影響を減らす。
- 11-7 だれもが、安全で使いやすい緑地や公共の場所を使えるようにする。



- 14-1 陸上の人間の活動によるものをふくめ、あらゆる海の汚染をふせぎ、大きく減らす。
- 17-17 効果的な公的、官民、市民社会のパートナーシップをすすめる。



けんがくハロウィン開催の目的

- ①活動団体がイベントを協力して催すことで、**連携を深め、まちづくりを促進**する。
- ②住民・活動団体と地元商店・企業との**連携を構築し、まちづくりを促進**する。
- ③地域を代表するような住民主体の駅前・公園イベントを実施し、**賑わいを創出し、公共空間を有効利用**する。
- ④地元住民に地元商店を再発見してもらい、駅前の**賑わいづくり**の一助とする。
- ⑤駅前周辺の**ゴミを削減**し、美しい**まちづくりを促進**する。

解決を目指すに至った背景

研究学園駅周辺地区（けんがく地区）が持つ背景 →交流が少ない

原因

- T X 開通で突然、生まれたまち
- ・人口の急増
(2005年：0人→2022年：20,022人)
- ・ほぼ100%が新しく移住してきた住民
(居住年数5年未満34% 10年未満56%)

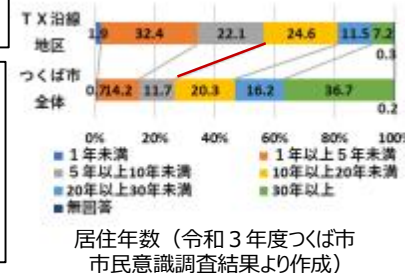
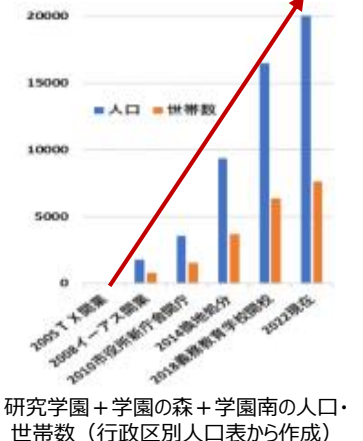
現状

- ①住民同士の交流が少ない
- ②活動団体の歴史が浅い
- ③活動団体同士の交流が少ない
- ④多世代の交流が少ない
- ⑤住民と地元商店との交流が少ない
- ⑥地域を代表するイベントがない

- ③④の解決のため、
2021年12月、2022年6月、
研究学園地区活動団体交流会を開催
2022年4月「研究学園さくらまつり」開催
2022年5月 けんがく活動団体協議会設立

確認されたこと ↓

団体**連携**のためのイベント開催の有効性
住民・団体と地元商店の**連携**の必要性



活動団体交流会

さくらまつり

2 手段

取組内容

けんがくハロウィンの企画・実施

- ①**方法**：けんがく地区の活動団体が実行委員会を立ち上げ、住民・商店・企業を巻き込み、地域を代表するようなイベントを実施する。
- ②**主体**：けんがくまちづくり実行委員会
- ③**対象者**：けんがく地区住民
- ④**時期**：2022年10月30日 15:00～17:00
- ⑤**場所**：研究学園駅前・学園の杜公園

大学生ボランティアが作成したチラシ



3つのメインイベント

①トリックorトリート

駅周辺の店舗がお菓子を準備し、子どもや親子連れが駅前を訪れる。



②ハロウィンゴミ拾い&ゴミ袋アート

トリックorトリートをしながら、駅周辺のゴミ拾いを行い、ゴミ拾い後はゴミ袋でパンプキンを製作。



③仮装コンテスト

仮装優秀者には駅周辺の店舗や企業から提供された景品を授与。



トリックorトリート協力店舗
(マップ印刷は
地元印刷機会社が協力)



2 手段（取組の特徴）

コスト（金銭的・人的・物的な必要コスト）

金銭的・物的コスト		
負担者	内容	金額など
活動団体	チラシ印刷費、保険料、会場装飾、ゴミ拾い・アート材料費等	24,848円
協力店舗	トラックorトリートお菓子60人分 仮装コンテスト景品	各店舗提供
協力企業	仮装コンテスト景品	各企業提供

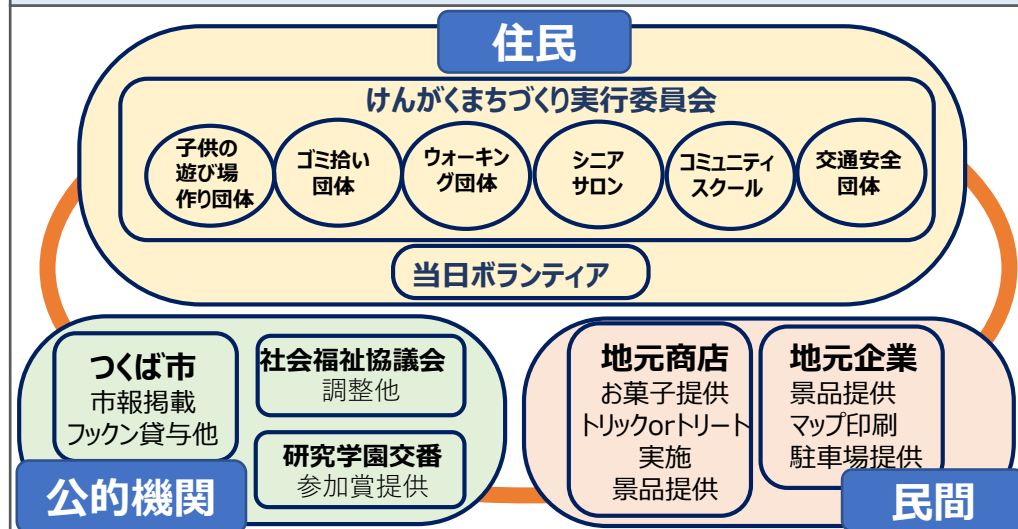
人的コスト（当日に限る）		
負担者	内容	人数
活動団体＋ 当日ボランティア	全体運営、受付、 警備など	29人
協力店舗	お菓子受け渡し	各店舗1人程度

実行委員会の支出
参加者1人当たり

約**41円**

各団体が所有して
いる物品を利用

連携の有無（多様な関係者との連携が図られた取組か）



汎用性（他の人も実践しやすい取組か）

各団体のリソース（人材、知識、情報、ノウハウ、人的つながり、物品など）を共有して実施

各団体が普段、行っていること、得意としていることを活かすだけで、団体単位では新しい試みはほぼ不要

ex. 子供の遊び場づくり団体：仮装コンテストを担当
 ゴミ拾い団体：ゴミ拾い・ゴミ袋アートを担当
 ウォーキング団体：体力を活かしフックン担当
 コミュニティスクール：学校や地域への呼びかけ

団体をつなげるだけで、実現可能な取り組み
 多様な団体が参画しているので間口が広く、参加しやすい

その他

- ・天候にも恵まれ、準備したトラックorトリートの袋もゴミ袋もすべてなくなり、約600人の参加者があった。
- ・予想以上の参加者数であったが、大きなトラブルもなく、参加者も実施者も楽しめるイベントとなり、継続を望む声が多数聞かれた。
- ・賑わいを創出しながら、まちをきれいにするという、正反対に思えるゴールを達成する新規性のある取り組みになった。

参加者（保護者）の声

「（こどもが）凄く楽しかったみたいで、今までで1番楽しいハロウィンだった！
 来年はもっと頑張るぞと意気込んでいました。」

「スゴイ盛り上がったので、来年も是非是非開催してほしいです！」

協力店舗の声

（イベントの盛況具合に驚きつつ）「来年はきっともっと増えますよね。協賛ももっと弾ませます！」

「子どもの笑顔は癒されます。来年もぜひ参加させてください。」

3 成果

取組の成果（課題解決の程度）

課題①活動団体同士の連携が見られない。

成果

- 各団体の実態、得意不得意を互いに認識。
- 顔なじみの関係を構築し、緩い組織化を完成。
- 共有SNSの立ち上げ。



課題②住民・活動団体と地元商店・企業との関わりが少ない。

成果

- 住民・団体と商店・企業間の連携の誕生・深化。
- 団体が会議に商店会を招待。
- 商店会が団体に商店会イベントへの協力を依頼。



イベント当日、社員総出で住民と触れ合う地元企業



11店舗（社）からの賞品提供

課題③駅前の広大な公共空間に賑わいが乏しい。

課題④学園の社公園で住民同士の交流が少ない。

成果

- 当日は600人以上の参加があり、駅前も公園も賑わった。
- 連携したイベントの集客効果を確認。



課題⑤駅前飲食店街のゴミのポイ捨て

成果

- ゴミ拾いを楽しく実施でき、少なくとも当日はゴミがなくなった。
- 参加者がポイ捨ての現状を認識。
- ゴミ拾いが交流のツールとなった。



今後の展望

けんがく地区の活動団体が展望する3つの連携

けんがくハロウィン（多様な地域連携）

地域を代表するイベントにしていく。

- 定期化・定着化を目指す。
- 参加者にやや世代の偏りがあったので、多世代・多様な人々が参加できるように工夫する。
- 地域の**多様な人・団体・商店・企業を巻き込んでいく**。
- 連携することで、各々の実施者の負担を最小限にする。
- 各々の強み・得意を活かすことで、各々が成長し、それを**まちの成長**につなげる。

けんがくさくらまつり（住民と団体）

今春、実施済み。地域を代表するイベントにしていく。

- 定期化・定着化を目指す。
- 地域資源である“千本桜”を活かしたイベントにする。
- “桜”をツールに、**多世代の交流**を図る。
- 団体と住民をつなぐ**イベントにする。

けんがく活動団体協議会（団体同士）

- 今年度から催している交流会を定期化・定着化する。
- けんがく地区の団体が抱えている共通の課題に、共に取り組む。
- (人的・金銭的課題、集まれる場所の確保、持続性など)

生理のタブー視をなくす

1 目的

解決を目指す課題

生理(月経)について話しにくい社会の雰囲気を変える。生理は一か月に一度あり、自分の体や体調について知ることができる、大事な体の働きであるのにもかかわらず、今の日本の社会は生理をタブー視していて、同性同士でも、また異性とでも話すことを避ける話題になっている。しかし、生理痛やPMSといった様々な弊害もあり、このような社会の雰囲気のせいで多くの女性が無理をしている。この雰囲気が原因で研究が遅れている女性特有の病気もある。(目標3,5につながる)

ほかにも、知識が浅いせいで、被災地に送られてきた生理用品を正しく配布しなかったり、送り返してしまったり、という女性にとっては苦しい事実もある。

女性の健康を考えるため、みんなが生理について話しやすい社会にすることを目標とした。



解決を目指すに至った背景

私はジェンダー平等に関心があり、調べていたら「生理の貧困」という問題がコロナ禍で大きく浮き彫りになっていることを知った。生理(月経)は私にとってとても身近なもので他人事ではないと感じた。そこで、#take actionという学校の有志団体のメンバーになり、女子トイレに生理用品設置を目標に活動することを決めた。

しかし、「生理の貧困」は経済的な理由だけでなく、生理について話すことがタブー視されている環境、男女間で知識に差がある現状が原因であると知った。

正しい知識を広めることは高校生の私にもできそうな活動だと思い、始めた。社会や環境を変えるためには、まず身近な人の考えから変える必要があると思い、学校の課題探求のテーマにも設定した。

2 手段

取組内容

①方法、②主体、③対象者、④時期・期間、⑤場所

①生理って何？

- ①ワークショップ
- ②自分
- ③並木中等4年次男子生徒(12名)
- ④2022/7/15 放課後
- ⑤学校の教室

【内容】

自作スライドを用いて言葉や行動について話し合ってもらった
生理や生理痛について
生理用品の使い方



②生理の貧困について学ぼう！

- ①ワークショップ、パネル設置
- ②自分
- ③すべての人
- ④2022/10/30
- ⑤BiViつくば 交流サロン

【内容】

生理や生理痛について
生理の貧困について説明、話し合い
左のチラシを学生に配布した



2 手段 (取組の特徴)

コスト(金銭的・人的・物的な必要コスト)

①生理って何？

生理用品の使い方を説明する際に、生理用ナプキンとタンポンを使用した。

②生理の貧困について学ぼう！

つくば市役所の方に協力してもらったパネルを作成する際に、模造紙を二枚使い、説明をまとめたものを印刷した。

連携の有無(多様な関係者との連携が図られた取組か)

①生理って何？

学校の友達にも協力してもらい、生理についてどのように考えているかを事前に話しあった。また、先生ともお話をし、自分の意見について話すことができた。このワークショップは学校の中の人と多く連携することができた。

②生理の貧困について学ぼう！

つくば市の「この指と一まれ！」というプロジェクトに参加し、つくば市役所の方や筑波大の学生に協力してもらいながら実施した。

汎用性(他の人も実践しやすい取組か)

ワークショップはクイズや実験などを取り入れて、説明だけではない楽しく進める工夫をした。また、「生理」は恥ずかしいものという認識をしている人が多いので、ポスターなどはポジティブなメッセージを入れ、参加するときのハードルを下げられるようにした。

パネルは設置するだけでも人の目に留まるので、人前で話すのは苦手という人も実践しやすいと思う。

その他

これからの未来を担っていく世代である私たちから生理に対する考え方を変えていくことで、将来の社会全体の考えかたを変えることが出来る。そのために、今まさにその世代である高校生である私が周りに働きかけていくことに大きな価値がある。

高校生が取り組んでいると知ってもらうことで、若い世代の関心を集めている喫緊の課題であると、今影響力を持つ大人に知ってもらうことができ、これが生理に対する意識改革につながる。

3 成果

取組の成果(課題解決の程度)

①生理って何？

初めは生理は話すのに抵抗があるという生徒がほとんどだったが、最後には「少し抵抗がなくなった」という人が増えた。また、彼らの誤った認識を訂正することができた。

②生理の貧困について学ぼう！

「勉強になった」という声が多くあった。正しい知識を身につけられたと考えられる。このワークショップへのアドバイスもいただけたので、自分のこれからの活動にも活かすいい機会になった。

私の目標は生理が、学校や職場で世間話をするのと同じくらいの話題として扱われるような社会にすることだ。これが達成できれば、女性や女の子が自分の体を大切にできるのはもちろん、男性もパートナーや友達、家族との人間関係をより豊かにできるだろう。

今回の2つのワークショップを通して、参加してくれた人の生理のとらえ方を少しは変えられたと思う。生理は人と話す内容ではないと考えていた人たちをワークショップの話し合い活動で「知るべきことなんだ。」、「生理について話すことは悪いことではないんだ」と思ってもらえたことは私の目標への大きな第一歩になった。

今後の展望

今回の二つの取り組みは、主に自分と近い人をターゲットにしてきた。これからの未来を担っていく人たちの考えを変えていくことはもちろん大切であるが、今の社会を作っている大人たちにもアプローチし、より早い解決を促したい。

そのために、活動の規模を拡大させたいと思っている。今年の六月に、私と同じようにSDGsの目標5「ジェンダー平等を実現しよう」に関心を寄せている生徒を集め、学校で非公式の有志団体を立ち上げた。今までの活動は、非公式であるため小規模で行ってきたが、これから公式化することで、今までよりも影響力のある活動ができるだろう。

今まで通り、ワークショップを開催しながら地道に正しい知識を知る機会を提供することはもちろん、授業を生徒主体で行ったり、オンライン形式のワークショップを開催したりなど活動範囲を広げていきたい。

また、このようにSDGsに積極的に取り組んでいるつくば市の行政と連携してアクションを起こしたい。

生理へのタブー視をなくし、生理をポジティブに考えられる人を増やして優しい社会を創っていく！